読売俳壇

矢島渚男 選

塀のなき古刹猪垣めぐらせり　宝塚市　広田　祝世

【評】古い由緒ある塀も垣根もない寺であったが最近は獣の侵入を防ぐ猪垣が張り巡らされていた。

食べるとは命いただく豊の秋　土浦市　今泉　準一

【評】命は普通、動物の命だが植物にも命がある。われわれ人間はすべての動植物によって支えられて生きている。そのことを意識し感謝して食べる。いま地球の温暖化で飢饉の時代が来ようとしている。

子規庵の病床の跡冬座敷　越谷市　小田　和夫

【評】根岸の子規庵は彼が病気と闘いつつ、近代国家のために俳句と短歌を改革し、凄絶な生涯を終えた病床があった場所に立った。

淋しいかべったら市に来てみても　深谷市　酒井　清次

焼藷や戦の記事に包まれて　町田市　枝沢　聖文

分断の果の戦火や冬の鵙　白井市　酒井　康正

寒いねとポケットのない服を着る　姫路市　菊亭　典夫

初時雨松宇復興せし庵　八王子市　徳永　松雄

北風や顔の真ん中鼻ひとつ　宮崎市　長友　聖次

牡蠣筏しなひて出荷始まりぬ　深谷市　三上　通而

宇多喜代子 選

朝焼の移ろひ消える冬の窓　豊中市　一色　正明

【評】朝焼けが刻々と空の様子を変えてゆく。その移り行くさまを窓越しに見ている。いつしか窓に見えるその動きも見えなくなる。

前を向きうしろを向いて日向ぼこ　桐生市　周東　孝一

【評】自分の座っている場所で、からだの向きを変えてみる。からだの前に日が当たったり、背中に日が当たったりする。そんな日向ぼこの楽しさがうかがえる。

補聴器へ綿虫百の息遣ひ　越谷市　小林ゆきお

【評】補聴器の性能の良さを、大袈裟に表現した句。音を出さずに群れ飛ぶ綿虫の息遣いと補聴器との兼合いに妙味がある。

ふるさとの駅舎そのまま冬銀河　秋田県　池田郷太郎

会心の秋の一句を投函す　千葉市　小林　昭

競ふかに渓谷へ散る紅葉かな　牛久市　中村　栄子

大根の穴覗き込む幼かな　川越市　大野宥之介

間をおいて言葉つぎたす温め酒　大竹市　二階堂顕二

読み聞かす日本の神話神の留守　志木市　谷村　康志

帯解や宮司と並び晴れ姿　京都府　山田　国雄

正木ゆう子 選

きつと誰か共に見てゐる冬の星　上尾市　中野　博夫

【評】冬は一年で最も星がよく見える季節だ。寒さに衿を立てつつ、シリウス、オリオン座、昴を仰ぐ時、きっと何処かで同時に見上げている人がいる。出会うこともない誰か。生き様はたてよこなめ変哲忌　仙台市　松岡　三男

【評】変哲は小沢昭一の俳号で、その命日は十二月十日。変哲とは、変わっていること。縦横無尽の活躍を見せた俳優を偲ぶに相応しい一句。

介護とは淋しき言葉もみじ散る　竹原市　岡元　稔元

【評】代わりの言葉を思いつかないが、介護という言葉にはどこか他人行儀な印象が。自分がされる側になれば、もっとそう感じるだろう。

おおきにと母の寝言や年の暮　下田市　森本　幸平

見舞いなくさよならもなく冬の月　神戸市　吉野　勝子

ちゃんぽんのごとき長崎くんちかな　富士見市　阿部　泰夫

水すまし笑ふと沈みさうなのよ　南房総市　山根　徳一

半袖で年賀ハガキを買ふ日差　浜田市　大島一二三

茶が咲くと鼻輪まだなき牛の市　津市　中山　道春

猫の本猫の置物漱石忌　東大阪市　渡辺美智子

小澤實 選

落葉掃く嫗に時給アップの報　青森市　天童　光宏

【評】がんばって働いている高齢の女性にいいニュースが届いた。携帯メールか、あるいは、口頭で伝えられたか。さらに元気よく落葉を掃いていることだろう、と想像できる。

年越のホール指揮者のよく跳ねる　前橋市　光峯　霏々

【評】年越のコンサートが行われているホールである。特別な時間ということもあって、指揮者は大熱演、ジャンプに次ぐジャンプである。

セーターの首元びろんびろんかな　甲府市　村田　一広

【評】よく着古したセーターである。首元がゆるんでしまっている。「びろんびろん」が楽しい形容。これを着ると、やすらぐのである。

牡蠣吸ひし殻に汁あり啜りけり　横浜市　岡　一夏

冬晴や火星探査機の孤独　瀬戸内市　岡本　尚子

コッペルの沸騰の音眠る山　さいたま市　新原　健

短日の墨池に映る猫の顔　京田辺市　加藤　草児

抱き上げぬ落葉まみれの猫くれば　伊勢市　藤田ゆきまち

日向ぼこ猫に特等席譲る　八代市　貝田ひでを

水涸るる河原は丸き石ばかり　倉敷市　中路　修平

枝しおり折

藤英樹著『俳句500年　名句をよむ』　前半は俳諧から始まった歴史を振り返りつつ、芭蕉や一茶などが残した名句をじっくり鑑賞する。後半は「俳句の多様化」と題して、山頭火らによる自由律俳句の発展や、戦後の前衛俳句を牽引した金子兜太の生涯などもたどる。

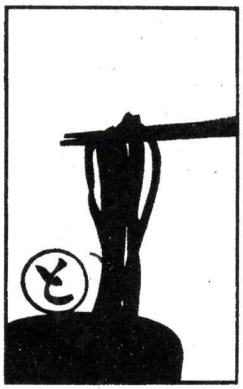
（コールサック社、2200円）

日高智歌集『みつばちのbuzz』　元高校教員で、「ポトナム短歌会」選者の第1歌集。教室のにぎやかな声が聞こえてくる。〈言葉もて伝うるちからこそ学べざなみのごと沁みゆく答辞〉

（青磁社、2750円）

◇

「読売俳壇」選者の宇多喜代子さんの選句は今回で最終回です。宇多さんには30年近く選者を務めていただきました。来年1月の紙面から、高野ムツオさんが担当します。高野さんへの投稿を受け付け中です。



題字デザイン・イラスト　福田美蘭